

# ロンドンブックフェア 2018

2018/5/8



4月10～12日に開催された今年のロンドンブックフェア。初日から例年以上に来場者が多く、活気に満ちていました。メインエントランスから会場に入ると、まずは Penguin Random House 社の巨大なブースが目に入ります。一般書に関しては世界最大規模の売上を誇る同社は、世界言語となった英語を武器にグローバル展開しています。一方、英語以外の言語圏の国や地域も存在感を示しつつあります。今回のレポートでは、そのような英語圏以外の出版社の取り組みにも焦点を当ててみました。その他、フェア会場で見聞したことや、会場で入手した資料や情報誌に掲載されていた注目に値する記事をピックアップし、ダイジェストにしてお届け致します。

-----

## Contents

- オバマ元大統領とミシェル元ファーストレディによる回顧録
- 「The President is Missing」でクリントン元大統領とジェームズ・パターソンが共同執筆
- 今年のマーケットフォーカスはバルト三国、各国の違いにスポットライト
- Amazon Publishing の快進撃
- 『習近平 国政運営を語る』（原題：『習近平談治国理政』）の各国語版を会場でお披露目
- 1000万件の作品を集める China Literature 閲文集団（チャイナ・リテラチャー）
- 中国では村上春樹、東野圭吾が不動の地位を確立。伊坂幸太郎も人気。
- シンガポールとロンドンを拠点に持つユニークな出版社 Balestier Press
- 多くの翻訳者の参加で大盛況だった Literary Translation Centre
- Three Percent が翻訳書データベースを PW 誌と共同運営
- IPR License を活用した著作権取引が今後拡大するか
- ベルリン発の英語文芸誌『Sand』
- Soho Press の編集者ジュリエット・グレイムスさんが小説家デビュー
- 日本のビジネス書や自己啓発書のポテンシャル
- ニュースダイジェスト

-----

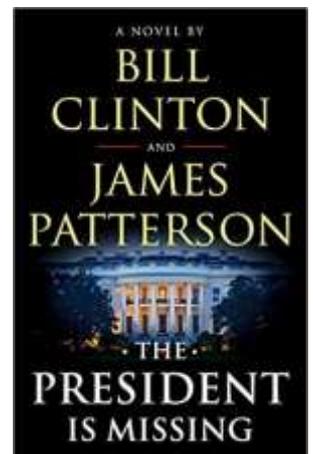
## ■ オバマ元大統領とミシェル元ファーストレディによる回顧録

キャプション：オバマ前大統領とミシェル前ファーストレディによる回顧録が今年、Penguin Random House 傘下の Crown Publishing Group より出版されます。2人合わせて6500万ドルという破格の前払印税額だったことも大いに話題となりました。日本語版はいったいどのくらい売れるのでしょうか。



## ■ 「The President is Missing」でクリントン元大統領とジェームズ・パターソンが共同執筆

ビル・クリントン元米大統領が、ベストセラー作家のジェームズ・パターソン氏と共同で、ホワイトハウスの内幕を描いた自身初のスリラー小説を執筆しました。今年6月にPenguin Random House社から刊行される予定で、題名は『The President is Missing』。Penguin Random House社は「大統領にしか知り得ない内部事情が描かれる」としています。



そのPRとしてロンドンブックフェア会場にアメリカ大統領執務室が再現され、トランプ大統領のそっくりさんまで登場し、多くの来場者の関心を引いていました。



『The President is Missing』PR映像  
[https://www.youtube.com/watch?v=14Bopiu\\_Ojs](https://www.youtube.com/watch?v=14Bopiu_Ojs)

## ■ 今年のマーケットフォーカスはバルト三国、各国の違いにスポットライト

今年のマーケットフォーカスはバルト三国。ロシア革命の翌年、1918年にバルト三国が独立して今年でちょうど100年という節目の年でもあり、その後ソ連に占領・併合される等、20世紀の激動の歴史を共有した国々の文化や出版界、作家の違いに焦点を当てながらさまざまなイベントやパネルディスカッションが開催されました。日本からは遠く感じるかもしれませんが、実際にブースを訪ねてみると、三国とも非常に文化豊かで魅力あふれる国々でした！

### エストニア

国土の多くを森林に囲まれた人口約130万人のエストニアは、Skypeを開発したことでよく知られ、デジタルと伝統や自然とが調和する国です。昨年は、人口減への対策として、外国人がエストニアの電子国民になれるという思い切った政策 e-Residency を打ち立てて世界を驚かせました。



今回ブックフェアに参加したのは、ソ連時代からの変化に対する批判で有名な Mihkel Mutt 氏や、学术界

や文学界で活躍する Rein Raud 氏。他にも、メランコリーなユーモアを描く詩人、短編作家、リブレット作者の Maarja Kangro 氏や、ロシア語作家で、難民キャンプでの経験を小説に描いた Andrei Ivanov 氏がいらっしゃいました。

### ラトビア

ラトビアの文学史はたったの150年ほどですが、30万以上存在するといわれる民謡からの影響が大きく、詩が盛んで、1960~70年代には詩人たちはまるでロックスターのような人気を博していたそうです。



人気作家たちが20世紀の歴史を描く小説シリーズがベストセラーとなっていて、Nora Ikstena 氏の『Soviet Milk』はイギリスでも出版されました。その他、「他者性」を描く作家、脚本家の Inga Ābele 氏や、不快な真実を楽しく描き出す詩人の Kārlis Vērdiņš 氏、そして近著でアートを紹介する探偵物語を描いた児童作家の Luīze Pastore 氏も参加していました。

### リトアニア

リトアニアも詩が盛んで、毎年2月に開催されるバルト三国で最大のヴィリニウスブックフェアも有名です。戦前から現代にいたるまでの文学で有名なものは、Vincas Mykolaitis-Putinas 著『In the Shadow of the Altars』(1933)、Antanas Antanas Škėma 著『The White Shroud』(1958)、Ričardas Gavelis 著『Vilnius Poker』(1989) など。



今回ブックフェアに参加した美術

史家で元特派員の Kristina Sabaliauskait 氏は一番の人気作家。文学批評家の Tomas Venclova 氏も、世界的に有名な詩人です。中国の文明化とキリスト教世界との衝突を描いた『Fishes and Dragons』で European Union Prize for Literature を受賞した Undinė Radzevičiūtė 氏や、作家、脚本家、俳優の Alvydas Šlepikas 氏も参加されていました。

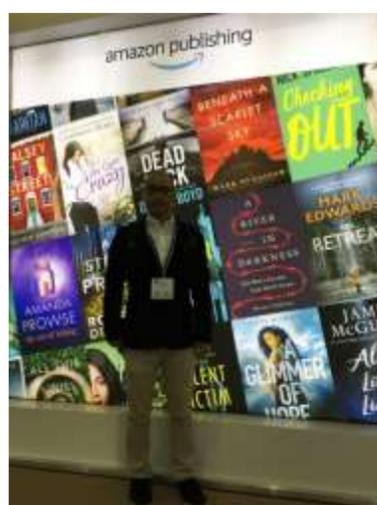
1918年の独立から100周年となる記念の年でもあり、1年を通して各種文化プログラムが開催されるようです。

(参考文献：Publishers Weekly Show Daily 10 April)

-----

## ■ Amazon Publishing の快進撃

前回のフランクフルトブックフェアレポートでもご紹介しましたが、小社が著者の代理人を務め、AmazonCrossing が今年一番の注目タイトルとして 2018 年 1 月 1 日にリリースした『A River in Darkness』。2 月には『Wall Street Journal』でも取り上げられ、一時は Amazon 著者ランキングで全米第 1 位となりました。また、今年に入り台湾、ハンガリー、フィンランド、イタリア、リトアニア、ロシアからもオファーがあり、各国語版の契約が進んでいます。



『A River in Darkness』がパネルで紹介されていました。

現在ロンドンにも新社屋を建設し、新たな編集部も立ち上げている Amazon は、ブックフェア 2 日目の夜には高級住宅街チェルシーにあるレストランを貸し切って Amazon Publishing のプライベートパーティーを開催。私も参加してきました。Amazon Publishing は現在 15 のインプリントを持ち、これまでにミリオンセラーを出した作家が 20 名もいるそうです。



Liverpool Street Station 近くに建設中の Amazon の新社屋



上 3 点：パーティー会場

AmazonCrossing の Editorial Director である Gabriela Page-Fort さんによると、金城一紀さんの『GO』の英訳版にも大きな反響があったとのこと。

<https://publishingperspectives.com/2018/03/translator-go-takami-nieda-kazuki-kaneshiro-love-before-trump/>

三浦しをんさんの『舟を編む』の英語版『The Great Passage』もよく売れているらしく、三浦さんの 2 作目を検討中の Page-Fort さんに『風が強く吹いている』を推薦しました。



AmazonCrossing Editorial Director の Gabriela Page-Fort さんと筆者

## ■ 『習近平 国政運営を語る』（原題：『習近平談治国理政』）の各国語版を会場でお披露目

中国国務院報道弁公室が中央文献研究室、中国外文局と共同で編集した『習近平 国政運営を語る』（原題：『習近平談治国理政』）。外文出版社を通じて、中国語、英語、フランス語、ロシア語、アラビア語、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、日本語など、多様な言語の書籍が巨大なブースに所狭しと陳列されていました。国家主席の任期制限を撤廃して「一強」となった中国の習近平氏。まるで毛沢東時代に逆戻りしたような中国が垣間見え、政治的にも世界に影響力を及ぼそうとしていることが感じられました。宣伝工作部門を使って国民を統制するやり方で世界をも手中に収めようとしています。果たして世界はそれを受け入れるでしょうか。



## ■ 1000 万件の作品を集める China Literature 閱文集団（チャイナ・リテラチャー）

中国語の文芸作品を中心にオンライン読書サービスを提供する電子書籍プラットフォームの最大手、[China Literature](#)。これまでに約 700 万人のアマチュアライターが約 1000 万件のオリジナルコンテンツを登録しており、1 億 9000 万人の読者が閲覧し、Tang Jia San Shao 氏や Mao Ni 氏のようなベストセラー作家も輩出しています。中国ではスマートフォンでの読書習慣が根付いているようです。

同サイトを運営する Shanghai Xuanting Entertainment Information Technology の親会社は、中国の大手 IT・ネットサービス企業テンセントです。同社はアジアでは時価総額ランキング No.1。創業は 1998 年、2004 年には香港市場に上場しました。「WeChat」と呼ばれるメッセージングアプリ（日本でいう LINE のようなものです）を軸に、幅広くサービスを展開しています。この「幅広く」というのが同社の特徴のひとつで、同種のメッセージングアプリ「QQ」、SNS アプリ「Qzone」、オンラインゲーム、ニュース、ビデオ、音楽、ブラウザ、そしてモバイル決済と、さまざまなプラットフォームを構築しています。

ヨーロッパや北米ではまだそれほどスマートフォンでの読書習慣は根づいていませんが、China Literature は英語圏に進出するにあたり [WebNovel.com](#) を立ち上げ、英訳した 150 タイトルを公開しました。そのほとんどが無料です。有料コンテンツは 100 ワードにつき 1 セント課金するというモデルですが、そのうち中国人作家による作品の英訳だけでなく、ヨーロッパやイギリス、北米の作家の作品も増やしていきたいとか。オンライン作品は極めて効率良くデータが収集できるため、読者の反応次第でゲーム化や TV シリーズ化も実現しており、今後は中国国内だけでなく世界規模でコンテンツの収集と展開を目論んでいるようです。

## ■ 中国では村上春樹、東野圭吾が不動の地位を確立。伊坂幸太郎も人気。

上海と北京に拠点を持つ中国の出版社とお会いしました。この出版社は、白石一文さんの作品の中国語版の他、京極夏彦、森見登美彦、吉田修一、三浦しをん、角田光代といった方々の作品も扱っていらっやいます。次の北京ブックフェアには白石さんを招待したいとのこと。これまでも吉田修一さんを中国に招待し、現地の熱心な読者との交流は大変盛り上がったそうです。日本人作家の中国への招聘は、日本文学の現地での人気を支えるという観点からも大変意義があるとのことでした。



## ■ シンガポールとロンドンを拠点に持つユニークな出版社 Balestier Press

Balestier Press はこれまでに田口ランディさんの『リクと白の王国』の英語版、そしてロジャー・パルバースさんの英語描き下ろし小説『LIV』を出版しています。今年2月にはロンドンの Daiwa Foundation にて『LIV』の出版記念イベントが開催されました。私は残念ながら参加できませんでしたが、ロンドン在住の翻訳者、ラッシャー貴子さんがイベントの様子をブログで紹介してくださっていますので是非ご覧ください。

<https://smileinuk.exblog.jp/27172876/>



Balestier Press の Roh さんを囲んで



『リクと白の王国』の英語版



『LIV』表紙

アジアの文学を英語圏の読者に届けることをミッションとする Balestier Press は、これまでに2回も Pen English Award を獲得しています。

1冊目は Xu Xiaobin 著『Crystal Wedding』で、もう1冊は Yan Ge 著『The Chilli Bean Paste Clan』。いずれも Nicky Harman さんが中国語から英語に翻訳しました。その Harman さんともお会いしてお話を伺ったところ、中国語から英語への翻訳は言語の構造がまったく異なるために大変な困難を伴うそうです。『Crystal Wedding』は、もともと中国で出版する予定だったのが発禁処分となったため、Balestier Press が英語にして世に問うたという経緯もあります。著者の Xu Xiaobin さんはカナダへの移住も検討中とのこと。

Balestier Press を興した Roh Shuan さんは台湾出身の元物理学教授で、文学好きが高じて出版社を設立した変わった経緯を持ちます。Pen English Award は The Man Booker Prize への登竜門にもあたり、とても大切な賞だと Roh さんは言います。ちなみに Pen English Award を受賞すると翻訳費用が全額、あるいは半額支給されるそうです。最近は申し込む出版社も増えて競争が激化したため、翻訳費用の支給が半額になることもあるのだそうです。

-----

## ■ 多くの翻訳者の参加で大盛況だった Literary Translation Centre

文芸翻訳に関する多様なパネルディスカッションが3日間を通じて開催される Literary Translation Centre は、毎年参加者が増えてきているような気がします。ここでは翻訳者同士が、翻訳に関する疑問から編集者への翻訳企画提案に関するコツまで、さまざまなことを語り合います。前述の AmazonCrossing がスポンサーになっており、関係者も多く参加していることから、各言語から英語への翻訳の仕事を探す翻訳者にとっては、良いネットワーキングの場になっているのです。



Literary Translation Centre に集う  
翻訳者や関係者たち

話はそれますが、これまで欧米では翻訳者に翻訳印税が支払われることは稀でした。しかし、翻訳者たちの地位向上のための方策が検討され、今では PEN America のサイトが翻訳者のための契約書サンプルを公開しています。

<https://pen.org/a-model-contract-for-literary-translations/>

会場では長年日本に住み、昨年末イギリスに帰国された日英翻訳家の Polly Barton さんとも再開しました。

Polly さんは柴崎友香、山崎ナオコーラ、窪美澄のような日本の名だたる作家の作品を英訳されています。いったいどのような経緯を経て Polly Barton さんのような優秀な翻訳家が誕生したのかについては、以下のインタビュー記事が参考になるかと思います。

<http://www.kaminotane.com/2018/03/27/2150/>



Polly Barton さんと筆者

-----

## ■ Three Percent が翻訳書データベースを PW 誌と共同運営

アメリカでの翻訳出版作品を追跡する [Three Percent](#) というサイトを運営している Chad Post 氏。ロチェスター大学が運営する [Open Letter](#) という翻訳専門の出版社の責任者でもあります。氏が 2008 年に立ち上げた[翻訳データベース](#)が、昨年 2017 年 9 月より Publishers Weekly 上でも検索可能となりました。

<https://www.publishersweekly.com/pw/translation/search/index.html>

アメリカにおける翻訳出版のデータをすべてカバーするのは容易ではありませんが、今後は出版社や翻訳者が直接データベースをアップデートできる仕組みにしていく予定だそうです。

-----

## ■ IPR License を活用した著作権取引が今後拡大するか

フランクフルトブックフェアが設立し、現在は China South Publishing & Media Group も株の一部を所有する著作権取引専用のプラットフォーム [IPR License](#) は、著作権を売りたい権利者が料金を払って登録し、買う側は登録料の支払いは不要。これまで非効率でアナログになりがちだった出版界の著作権取引に風穴をあけることができるか、注目されます。

日経 BP 社のページはこちら：<https://iprlicense.com/Company/489>

-----

## ■ ベルリン発の英語文芸誌『Sand』

ベルリンを拠点に短編や詩、クリエイティブ・ノンフィクションで新たな才能を発掘し、英語で世界に発信している文芸誌『[Sand](#)』。その編集長 Jake Schneider さんとお会いしました。Jake さんのお母様が日本に住んで翻訳家をされていたこともあり、幼少の頃より日本や翻訳、そして文芸の世界に興味を持っていたそうです。

『Sand』はドイツの作家だけを扱うのかと思いきや、世界中の才能を発掘して英語で紹介しているようで、ベトナムへの取材旅行の記事などを読んでみて、彼らの文学に対する情熱と好奇心に驚かされました。文芸やアートが大好きなスタッフがボランティアとして制作を支えているそうです。隔年で紙媒体も発行しており、1号あたり 10 ユーロで販売しています。

<http://sandjournal.bigcartel.com/product/sand-issue-16>

-----

## ■ Soho Press の編集者ジュリエット・グレイムスさんが小説家デビュー

[Soho Press](#) の編集者ジュリエット・グレイムスさんとブックフェア最終日の夜に食事をしました。Soho Press は中村文則さんの『[掏摸 \(スリ\)](#)』の英訳『[The Thief](#)』を出版し、大成功に導いたことでも知られるアメリカの独立系出版社です。『[The Thief](#)』は Amazon.com の「月間ベスト 10 小説」や、『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙の 2012 年「ベスト 10 小説」「ベスト 10 ミステリー」にも選ばれました。



Soho Press の編集者、ジュリエット・グレイムスさんを囲んで

その Soho Press の辣腕編集者であるジュリエット・グレイムスさんがこの度小説家としてデビューを果たすことになったのですが、出版前からさまざまな言語に著作権が売れているそうです。ジュリエットさんはイタリア系アメリカ人として常に自分のルーツに関心を持ち、祖母から聞いた話をもとに今回のイタリア系移民のサーガを書いたといいます。

実は小説を書くにあたり、もし小説家デビューが散々な結果に終わったら編集者としての自信も失うのではないかと一人不安に苛まれる日々を過ごしたといいます。けれども原稿を読んだエージェントや出版社を通じて大変な評判となり、今回のロンドンブックフェアには Soho Press としてではなく、作家として参加されたのでした。「これまで 18 年程出版社で編集者として働いてきたので、出版のことはなんでもわかっているつもりになっていたけれども、いざ小説家としてデビューしてからは、まるで別世界を生きているよう」というジュリエットさんのコメントが印象に残っています。

実は、Soho Press から出版されたフィリピン発のクライムノベル『[Smaller and Smaller Circles](#)』の日本での翻訳出版を目指し、私が発起人となりクラウドファンディングのプロジェクトを立ち上げ、必死になって支援者を募っていたところ、ジュリエットさんと同僚のアマラさんがビデオで応援してくれたので、今回ロンドンで直接お会いして御礼を言いたかったのです。

<https://greenfunding.jp/thousandsofbooks/projects/2055/activities/5062>

それが果たせてとても嬉しかったですし、Soho Press の決してトレンドを追わない出版ポリシーについてもお話を伺えて、大変勉強になりました。

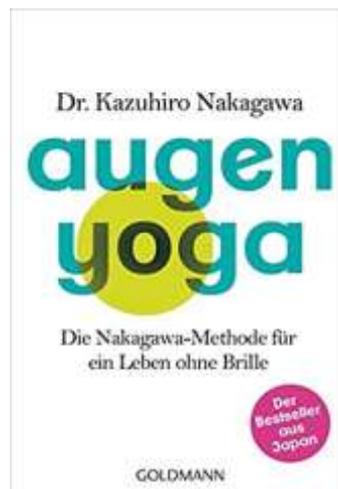
-----

## ■ 日本のビジネス書や自己啓発書のポテンシャル

トランネットがエージェントとして欧米で紹介しているのは文芸作品にとどまりません。『視力回復で近視も老眼も怖くない即効！「見る力」フィットネス』（中川和宏著／新潮社）は、コンマリを世界に広めた NY の辣腕エージェント、Neil Gudovitz さんと共同で、これまでにイタリア語、ドイツ語、ポルトガル語、スペイン語の翻訳出版契約を結び、現在もフランス語版、ポーランド語版のオファーをいただいています。

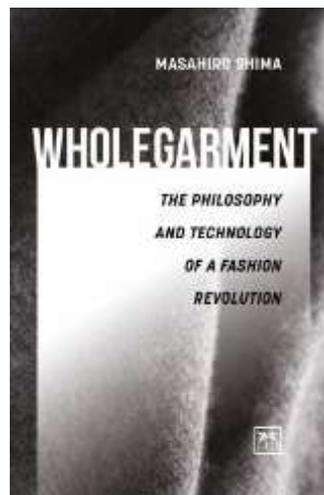
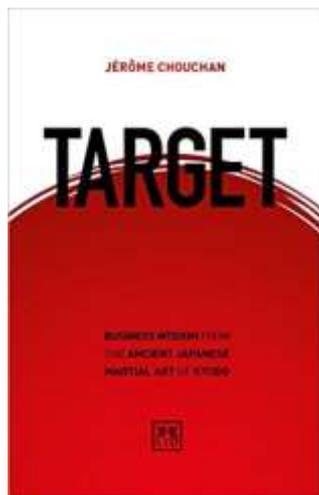


イタリア語版



ドイツ語版

また、イギリスの [LID Publishing](#) と組んで日本のビジネス書を英訳出版し、さらには世界に版權を売っていただいています。



トランネットでは、海外、特に欧米圏にリーチされたい著者や出版社のために、英文資料から翻訳までお手伝いさせていただいております。ご参考までに以下のリンクをご覧ください。

[http://www.trannet.co.jp/pre\\_up/new\\_column/2018/translation.pdf](http://www.trannet.co.jp/pre_up/new_column/2018/translation.pdf)

## ■ ニュースダイジェスト

### 1. 読者を魅了し続けるパウロ・コエーリョ氏インタビュー

(Publishers Weekly Show Daily 12 April)

80カ国語に翻訳され、今も全世界で売れ続ける『アルケミスト』から30年。コエーリョ氏は今年、1970年の自らの旅の経験を描く自伝小説『Hippie』を刊行する。

——**新刊は自伝ながら三人称で書かれていますね。**

自分が激しく生きた時代や価値観、特に団結について書きたかった。三人称にすることでヒッピー仲間をよく描けたと思う。70年代は女性が自由で、自然を大切にするのは当たり前で、音楽もすばらしかった。今は差別的になることを気にし過ぎて窮屈だ。

——**以前に電子書籍の高価格を指摘されました。今も同じお考えを？**

もちろんだ。著書をアメリカのKindleセールに1.99ドルで出したら、売上が900%近く増加し、その後も売上が伸びた。電子書籍の停滞は市場全体の影響だろう。

——**書店は生き残れるでしょうか？**

書籍が上向いたのは単に宣伝の成果で、書店のサポートはまだ足りない。

——**業界に影響が大きいSNSについての見解は？**

宣伝には最適なツールだが売上につながらない。成長中のオーディオブックは期待できるかもしれない。これからは古代ギリシャの格言のような、短く簡潔な形に戻るのではないか。本は読者が参加できる映画のような存在であることは変わらない。

新刊は、ブラジルではCompanhia das Letrasから5月に、アメリカではKnopから今秋に刊行の予定。編集者のSuzuki氏は、「愛と発見、絶望と緊張を駆け抜ける作品。著者が作中にいることでインパクトが強くなった」と語る。

### 2. 英語でない声が聴きたい

(Publishers Weekly Show Daily 12 April)

今年1月にコロンビアで開かれたHay Festival Cartagena de Indiasで、南アメリカ出身の作家J・M・クッツェーが「英語が世界を独占しているのは傲慢であり、好ましくない」と発言した、とHay Festivalの国際部門責任者Cristina Fuentes La Rocheは語る。

中南米では原書・翻訳書を問わず英語の作品が広く読まれている一方で、イギリスでも著名なヒスパニック系作家は非常に少ない。刊行される書籍の中で翻訳書が占める割合は、フランス27%、スペイン28%に対し、イギリスではわずか2~3%だ。

ボゴタがUNESCO World Book Capitalに指定された2007年、Hay Festivalはジュノ・ディアスなど40歳以下の有望な中南米作家39名をボゴタ39として発表し、彼らの作品を英訳した短編集を世界中で刊行した。

Hay Festival はその後も、2009 年にはベイルート 39 (現代アラブ作家)、2014 年にはアフリカ 39 (サハラ砂漠以南の作家)、昨年にはオーフス 39 (ヨーロッパの児童・YA 文学) を発表。他国の文化を通じて視野を広げ、優れた作品を他言語でも読めるようにすることが重要であるとして、この活動に取り組んでいる。

今年は新たに中南米 15 カ国の 200 人を超える応募者の中から新ボゴタ 39 を選出し、来月イギリスで Oneworld から短編集を刊行する。英訳されるのは初めてという作家がほとんどだ。

10 年前のボゴタ 39 同様、これが新たな動きにつながることを期待しよう。他の言語で生まれた声が受け入れられる余地は確実にあるのだから。

### 3. グッドモーニング、ベトナム

(Publishers Weekly Show Daily 10 April)

ベトナムでは昨年、Tran Dan 氏の埋もれた傑作『Crossroads and Lampposts』が発掘され、イギリスでの出版が決まった。そんなベトナム発の文芸雑誌『Mekong Review』が、東南アジアの『Times Literary Supplement』(訳注：イギリスの伝統ある文芸書評誌) となる勢いを見せている。

『Mekong Review』は、ベトナム、カンボジア、ラオス、インドネシア、タイ、マレーシア、ミャンマー、ブルネイ、東ティモール、シンガポールで、出版界にも読者にも待ち望まれていた。創始者である Minh Bui Jones 氏のオフィスには、ライターや出版者、編集者、作家らが、原稿や書籍を持って押し寄せる。東南アジアには、若く勇敢な書き手が多いのだ。同氏は、「本には 2 種類ある。美しく書かれた本と、美しくはないが有無を言わず引き込まれる本だ」と語る。

『Mekong Review』はあらゆる話題に新鮮な視点を提供している。ベトナム戦争終結 50 周年には、Michael Uhl 氏がソンミ村虐殺事件を暴露的に再評価した。また、Graham Greene 著『おとなしいアメリカ人』の議論には女性の見解が足りないと考え、女性ライター Mai Huyen Chi 氏による瑞々しいエッセイを掲載した。Jamie Marina Lau 氏の処女作『Pink Mountain on Locust Island』の抜粋は、眩暈がするほど強烈だった。

『Mekong Review』は、アメリカでは Scribd や書店でも販売される予定で、今後グローバルな展開も計画されている。是非 <https://mekongreview.com/> でご覧いただきたい。

### 4. 児童書の売上、イギリス国内事情と海外事情

(Publishers Weekly Show Daily 10 April)

Nielsen BookScan のデータによると、イギリスでは 2017 年、児童書の売上がやや落ち込んだ。だが原因は、前年の『ハリー・ポッターと呪いの子』の売上 (150 万部、1600 万ポンド) にある。児童書の売上は、2013 年から堅調に伸び、2016 年に過去最高を記録。2017 年はそれに次いで過去 2 番目となった。

2017年の児童書の売上は、9カ国中6カ国で伸びている。世界のベストセラートップ10のうち、5冊は児童書だ(『Bad Dad』『Good Night Stories for Rebel Girls』『The Getaway』『The World’s Worst Children 2』『Guinness World Records 2018』)。著者別の売上では、児童書の著者が6カ国で1位、3カ国で2位となった。

イギリスでは、子ども向けノンフィクションやシリーズもの以外のYAが成長を見せた。YAで注目の作家は、Nicola Yoon、Jay Asher、John Green、Karen McManus、Emery Lord。

2017年の読者調査では、25歳までの読者の半数がフィクションをより好んだ。フィクションに求めるものは現実逃避性、興奮、ユーモア。人気のジャンルは、0～13歳は笑える話、14～25歳では冒険ファンタジー、ミステリー、SFファンタジー。趣味での読書頻度は、0～17歳で毎週が75%、毎日が46%、18～25歳で毎週が55%、毎日が26%。オーディオブックへの関心は高いが、電子書籍よりは紙の書籍が人気だった(0～25歳の86%)。

## 5. はばたく少女漫画家

(Publishers Weekly Show Daily 11 April)

今や漫画は世界的な現象となっている。アメリカでコミックの読者といえば主に男性だが、「Shojo Manga」と呼ばれるジャンルには圧倒的な数の女性読者がいる。そして、女性作家の活躍が異彩を放っている。

今年、ロサンゼルスに本拠を置く漫画出版社 TOKYOPOP は、世界の女性漫画家たちを特集している。イラク出身でカナダ在住の Sophie-chan 氏は、『Ocean of Secrets』の2巻を発売したばかり。同氏はデビュー前、YouTube にイラストの描き方を投稿していたのだが、動画の総視聴回数は 3300 万回、チャンネル登録者数は 40 万人に上っている。「YouTube への挑戦が今のキャリアに影響している」と同氏。

Sophie-chan 氏と家族は 1995 年、第 1 次湾岸戦争の 4 年後にフセイン統治下のイラクを離れ、中東やアフリカを転々とした。「物語を作るのも絵を描くのも好きで、漫画と出会った。でも、漫画家の夢を追うのは困難だった」

『Ocean of Secrets』では 10 代の孤児 Lia が海で遭難し、魔法の船に乗った逃亡者に救われる。そして物語は、陰謀と魔法で引き裂かれた天空の王国へと続いていく。「Lia は 7 年前から考えていたキャラクター。愛する人たちのために命を投げ打つような少女」だという。また、「日本式の描き方で感情を存分に描けた。漫画で表現できるスタイルや感情が大好き」と語る。

## 6. 実書店を変革させる Amazon

(Publishers Weekly Show Daily 11 April)

Jeff Bezos 氏が Amazon を立ち上げたのは 1995 年。2015 年に 1 号店がオープンした実店舗 Amazon Books は、2017 年にはニューヨークへ進出し、店舗数は 13 に拡大。食料品チェーン Whole Foods の買収により、Amazon の実店舗基盤はさらに強化されている。

ジャーナリストでブロガーの Cherie Hu 氏は、Amazon Books を訪れ、従来の書籍販売というアナログ環境がひっくり返ったことに気が付いた。「ネットの Amazon と同じように実店舗でも本が選べる」と同氏。書籍情報が本の下に配置され、星の数も確認できるのだ。レビューが 1 万件以上の本だけを集めた棚もある。本はすべて表紙を前にして陳列され、本と本とが「この本が好きなら、この本もおすすめ」という矢印でつながれている。デジタルで実世界を真似るスキューモーフィズムを逆の発想で活用し、デジタルを実世界に取り入れたと同氏は指摘する。

Amazon のこうした店舗作りは、豊富な顧客データの賜物だ。「顧客の詳細な情報を得るのが難しいのは、実店舗がデジタルありきでビジネスをしてきたわけではないからだ。だが Amazon は違う」と Hu 氏。「Amazon Books が成功したのは、競合ができない形で実店舗に付加価値を与えられたからだろう」

デジタル界のリーダーは、データの力を使い、実世界にも影響を及ぼしている。

-----

以上、駆け足でロンドンブックフェア 2018 の概況をお伝えしてまいりました。今回は東京からトランネット翻訳会員の小島明子さんも合流され、最終日は一緒に関係者ともお会いしました。以下、小島さんからブックフェア初体験の感想をいただいております。

+++++

ネットだけでは見つけきれない、世界のさまざまな本に触れたいと思い、海外ブックフェアに参加しました。会場では、各出版社が今年発売予定の新刊を競って並べているだけでなく、欧米の翻訳家たちが集結し活発にディスカッションするセッションがありました。翻訳の技をどう磨くか、自分が翻訳したい作品をどうプレゼンするかといった実務的な内容だけでなく、少数言語の翻訳、異文化の橋渡し役として翻訳者に求められる役割など、幅広いテーマでの議論が連日行われており、翻訳について改めて考えるひとときとなりました。

小島明子

+++++

英日翻訳者の小島明子さんや日英翻訳者の Polly Barton さんらと会場を巡り、多くのことを学ばせていただきました。翻訳者の皆様に支えられて成り立つ著作権ビジネスであることを改めて実感するとともに、文学の普及活動についても今後はより一層、翻訳者の皆様とのコラボレーションを加速させたいとの思いを新たにした今回のブックフェアでした。

## ■ おまけ

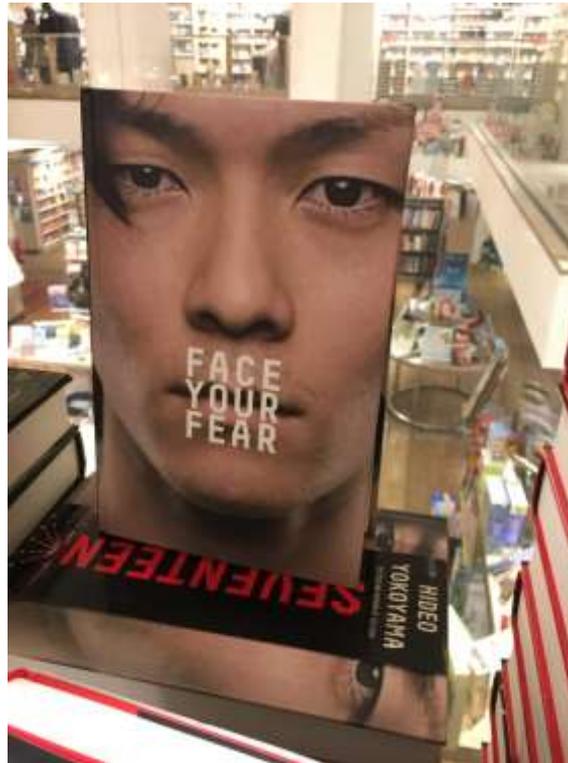


ロンドンのあちらこちらでウェス・アンダーソン監督の最新作『Isle of Dogs (犬ヶ島)』の広告が目につきました



東京在住のイギリス人作家デイヴィッド・ピース氏による最新作『Patient X』がロンドンの人気書店 Foyles でハイライトコーナーに展示されていました

以下はロジャー・パルバースさんによる『Patient X』のインタビュー記事です。  
<https://www.japantimes.co.jp/culture/2018/04/07/books/patient-x-david-peace-intensely-profound-portrait-writers-life-death/#.Wta85ExuKEY>



横山秀夫氏の『Seventeen』（クライマーズ・ハイの英訳版）も目立つところに陳列してありました

今後ブックフェア期間中にリクエストしたタイトルが海外から数多く届きますので、会員の皆様には引き続き概要やリーディングでお力添えをいただきたく、何卒よろしくお願い致します。

近谷浩二

記事抄訳協力：樋田まほ・ラッシャー貴子

参考文献：Publishers Weekly Show Daily、Publishing Perspectives、BALTIC COUNTRIES Market Focus 2018

Copyright(c) 2018 TranNet KK all rights reserved



株式会社トランネット

〒106-0046 東京都港区元麻布 3-1-35

VORT 元麻布 4階

<http://www.tranet.co.jp>